



これまで古民家は何代にもわって再利用されてきた歴史を持つ。また古民家に限らず伝統工法の建築は解体組み立て工事が可能な建築であり、他の建築の解体に伴う再利用、転用など補修しつつ繰り返し活用されてきた。また自然の木材を再利用していくことは地球環境にとっても望ましいといえる。

また、二酸化炭素を木自体の中に封じ込めている点も見逃せない。このような諸要因が関係しあい古材の持つ美しさや自然力を生かすのが再利用の大きな役割である。

一般的には古民家から取り出された材を新築に再利用する場合は、移築工事とは内容・規模が異なり、一軒の住宅に数本の材を再利用することになる。使われる材は松梁が多い。柱は長さ不足のほかに、貫や指物、敷居や鴨居、改造などの仕口や柄穴などの痕跡、欠損部が多い点などから、再利用されるのは大黒柱など一部に限られることが多い。

### ●古材とコスト

古材は規格品や工業製品のような画一性がなく、材種、状態、形状などそれぞれ異なる。利用者の立場からは評価が難しい。近年、古材のコストの目安となる見方や分類がなされ、査定基準の設定が明示され進展している。主な基準となる項目を参考に記しておく。

①サイズ②形状③築年数④プラス査定⑤マイナス査定などの指標が示されている。詳しくは井上幸一著「古材—環境時代の選択」東洋書店（2010）に記載され、また古材の持つ価値等様々な知識をふまえて解説されているので参照されたい。

### ●古材補修

使用する古材は、塗装を含めて補修が必要である。解体し廃棄処分される前に再利用が可能と思われる材を特定することになる。再利用部分の解体作業は、手壊しにより材の保全を行う。選定の際、事前に木槌による打音等により内部の腐朽、空洞化、蟻害の状態を調べる必要がある。

材には、ほぞ穴や欠き込みがあるため、埋め木して使用する。また欠きこみが1/3以上になる場合には、材の強度を査定して、利用部位により継ぎ手補修など新材との接合などの対応を図る。新材と古材との接合に際し、当初材に合わせた樹種を選び、接合部は末口・元口を判別し、男木・女木の組み合わせを判断する。

なお、古材を構造材として利用するには、ヤング係数を測定して強度を確認する。

### ●古材調達と古民家再生

古材の流通は古民家の解体により確保される。解体作業は、主に、解体専門業者と建設業者による。解体を行うに際し、前者は解体工事業者登録者、後者は一般建設業許可者の基準・条件に相違点があるが、共に建設リサイクル法の規定に従うことになる。

古材の調達・流通・消費の活性化は、一方で古民家解体の動機づけとなりうる。古材は流通したが、長寿命の伝統民家自体が消滅する両刃の剣となりうる点を回避する必要がある。その意味からすると古材の流通と調達は古民家解体市場ともなりうる。良質の古材の調達と再利用は「出口」における優れたエコ産業であって「入口」ではない点を明確化し、相補的、相乗的にエコ効果を高めたい。